

令和5年度 奈良市立若草こども園 研究実践概要

園長名 檜内 祐子
全園児数 46名

1. 研究主題 「環境を通していきいきと遊ぶ子どもをめざして」

2. 研究年度 3年度

3. 研究主題設定理由

- ・子どもが自ら遊びを見つけ遊びを継続していける環境を探り、主体的に遊ぶ子どもの育成を目指し取り組んでいる。今年度も引き続き取り組む中で、乳児組のおひさまランド（乳児用プレイルーム）と幼児組の外遊びの環境に焦点をあて、子どもの主体性を引き出す環境や発達に即した保育内容の工夫に取り組んでいきたい。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

- ・身近な環境や人との関わりの中で子どもが心や体を動かし、いきいきと意欲的に遊ぶ環境や援助を工夫し、保育内容の充実を図る。

②研究の重点

- ・好奇心や探求心をもって遊んでいる子ども一人一人の姿を捉え、職員間で共有する。
- ・職員間での話し合いを定期的に行い、子どもが主体的に遊ぶための豊かな環境構成や保育者の援助のあり方を探る。

③活動の方法

- ・年度初めに子どもの姿を出し合い、研究主題を確認し、ねらいについて全職員で共通理解する機会をもった。その上で具体的な実践について乳児・幼児組それぞれで話し合い、各年齢の子どもの成長発達や興味・関心に応じた環境づくり、また、子どもが自主的に遊ぶ環境づくりを目指し取り組む。また、学期ごとに振り返りや情報交換を行い、ねらいの達成状況や取り組み内容等についてさらに検討していく。

<取組の経過>

○乳児組

<ねらい>

- 0歳児 ・特定の保育者とふれあい心地よく過ごす。
・保育者との安定した関係の中で探索活動を十分楽しむ。
- 1歳児 ・保育者との信頼関係の中で、自分のしたい遊びを十分楽しむ。
- 2歳児 ・したい遊びを見つけて、保育者や友達とのやりとりを楽しみながら遊ぶ。

<内容>

おひさまランドには、太鼓橋やハイハイマットなどの用具を置き、広い空間も確保しながら、体を動かせるよう環境をつくってきた。しかし、フープやボールなど小さな用具は、子どもの手の届かない所に置いていたため、自ら遊びを見つけ、楽しめる環境ではないことに気づき、子どもがワクワクするような環境をつくるにはどうしたらよいか保育者間で話し

合った。そして大型マットですべり台をつくったり、風船マットを置いたりするなど、カラフルな色を使うことで視覚でも楽しめるようにした。また、子どもがしたい時に遊べるようにボールやフープなど手の届く場所に置くようにした。後期は、手足の力を使って大型マットを登ったり、体全体のバランスが取れるようにトランポリンを置いたりして、子どもの成長と共に環境にも変化を加えていった。また、ボールプールのボールを布団に変えることで、一人で落ち着ける場所ができ、静と動のバランスを考えることができた。



<反省・評価>

子どもの成長・発達を踏まえ、どんな力を付けたいか、遊びたいと思える環境はどんな環境なのか保育者間で話し合い環境を整えていくことで、手足の力、体幹などが少しずつだが育ち、子ども自らしたい遊びを見つけて遊ぶ姿が見られるようになった。異年齢児で遊ぶ際には、安全に遊ぶための約束事を決めて、保育者が共通理解しておくことが必要だと感じた。

○3歳児 ごちそうづくり『できましたよ』

<ねらい>

・身近な自然物に触れたり、集めたり、友達とのごっこ遊びに使ったりして楽しむ。

<内容>

園庭には、春には梅の実、秋にはドングリ、カツラ、イヌツゲなどの木の実がなり、砂場やわかかさハウスで、子ども達がそれらの実を使ってごちそうづくりを始める。

赤い木の実が落ちていたことに気付いた子が「これ、いちごみたい」と言って友達に見せると「それどこにあったの?」「ケーキのかざりにしたい」など友達同士の会話がはずみ、赤い実の場所を教え合ったり、木の実集めを始めた。保育者はさりげなく、木の実の他に落ち葉や小枝など自然物を集めたものを取り出しやすくしたり、使いやすいうように種類別に入れ物に入れたり、食事用と調理用の机や台を分けたりした。すると自分のつくりたい料理に必要な物を取り出し、飾り付けたり混ぜたりしながらごちそうをつくるようになった。しばらくすると、わかかさハウスのカウンターではフードコートイメージして注文を聞き、大きめの葉っぱを渡して「ピピってなったらきてください」と伝えていた。料理ができると「ドングリごはんとドングリパフェできましたよ」と言って渡すなど、友達とのやりとりを楽しんでいた。飾っておくスペースをつくると、その日だけでなく次の日も継続してごっこ遊びを楽しんでいた。



<反省・評価>

子どもがどんな遊びに興味をもち、どんな物を必要としているのか観察し、存分に楽しめるよう素材や用具や量を工夫した。また自然物を分類し取り出しやすくすることで、つくりたいもののイメージがしやすく、必要な物を必要な分だけ取ることができた。

ごちそうづくりをする中で、友達や保育者とのやりとりや会話がはずみ、一緒に遊ぶ楽しさを味わうことができた。子ども達が興味、関心をもち「またあそびたい」「つぎ、こんなんつくりたい」という思いがもてるような環境を整えることが大切だと思った。

○4歳児 『忍者の修行』

<ねらい>

- ・いろいろな遊びや活動に自ら関わり、意欲的に遊ぶ。

<内容>

チャレンジタイムとして、園庭のタイヤとジャングルジムや鉄棒などの固定遊具を使い、サーキット遊びをしてきた。飛び越える、登る、ぶら下がるなどの動きをする中で、ボディイメージが苦手な子には、友達が体を動かしている姿を見ながら具体的に伝えるようにした。途中であきらめようとする子もいたが、「がんばれー」「もう少しでできる」など友達の応援と「忍者の修行や」との言葉で、「修行をがんばる」と続ける姿が見られた。体を動かす時にもっと手足の動きを意識して動かして欲しいという保育者の思いから、梯子や巧技台、タイヤ、マットなどを用意してサーキット遊びを変化させた。すると手足の動かし方やバランスの取り方など意識をしながらサーキット遊びを楽しむようになった。サーキット遊びに苦手意識をもっていた子も、「忍者の修行をしたい」と体を動かし、「修行にはいろいろな事がある」と子ども達から話が出て、巧技台やマットなどの片付けも修行にして子ども達が率先してするようになった。「一緒に持って」「もう少しあっちまで行こう」と言いながら、準備も子ども達がするようになり、友達と一緒に運動用具を運ぶために力を合わせる経験をすることができた。その他の活動においても、友達の姿を見てさり気なく助けたり、友達と力を合わせたりするようになってきた。



<評価・反省>

振り返りの時に子ども達は、保育者や友達に自分が頑張っている姿を認めてもらい自信をもったり、友達が頑張っていることを知り刺激を受けたりして「また挑戦したい」と意欲的に取り組むことができた。そして自分たちで考えて準備したり片付けたり、協力してしようとする姿につながった。

○5歳児 『ホイップクリームできた』

<ねらい>

- ・共通の目的をもった友達と考えを出し合いながら、協力して遊びや活動に意欲的に取り組む。

<内容>

春からしていた色水遊びに続き、自分たちが必要だと思う石鹸やボール、泡だて器などを出して、泡遊びが始まった。泡立ったり、泡の感触を楽しんだりする中で「なんかケーキ屋さんみたい」「生クリームみたいなのがつくろうよ」とホイップ状を目指した泡づくりが始まった。ケーキのトッピングに使えるような固いホイップを目指すのが、今まで通りつくってもなかなかうまくいかない。石鹸を多くしてみたり、長い時間たくさんかき混ぜたりしてみても、泡立つがシャバシャバになり、なかなかうまくいかなかった。「次は水の量を少なくしてみる」と言って水の量を減らして泡立ると「みて！泡だて器を逆さに向けてもたれない。ホイップクリームみたいにできた！」と喜ぶ姿があった。ホイップができた子は「みんな、水が多すぎるよ。手を洗う時も石鹸に水をつけると流れていくでしょ。だから石鹸を多くして、水はほんの少しにしたらいよいよ」と、自分の成功経験から友達に分かりやすく声をかける姿がみられた。それを聞いて、他の子も水の量を少なくしてホイップをつくっていった。今までペットボトルから水を注いだり、蛇口から直接水を入れたりしていたが、水の量を少

しずつ調節することができるように、自分達でドレッシングやゴマの容器に水を入れてから水を使うなど、工夫する姿も見られるようになった。ホイップクリームができると、ケーキをつくることになり、必要な物を振り返りの時間にみんなで考えると、ヘラや絞り器、カップなど子どもから必要だと思う物、使いたい物がたくさん出た。次の日から準備をしておくと、自分で使いたい道具を選択し、ケーキを夢中でつくるようになり、次第にケーキづくりからお店屋さんごっこに発展した。毎日振り返りの時間でアイデアやつくりたいものを話し合うと「それいいね」「ケーキ屋さんには看板もいるよね」「明日つくろう」とお互いの思いを伝え合い役割分担をしながらごっこ遊びを進める姿がみられるようになった。



<評価・反省>

うまくいかないからといってやめるのではなく、どうしたらうまくできるか子ども達同士で考えられるように、保育者は見守ったり必要な時に声を掛けたりした。すぐに保育者に答えを求めようとする子も、友達と一緒に納得がいくまで考えてやりきる姿につながった。また、水や石鹸の特性に気付き、試したり工夫したりしながら夢中になって遊び、自分たちで役割分担をしたり、必要な物を準備したりしながら遊びを発展することができた。

5. 研究の成果

各年齢の子どもの発達や興味をその都度捉え、受け止めて子どもの好奇心や探求心をより一層高められるような保育者の言葉掛けや援助、環境を構成できるように話し合うことが出来た。乳児組では共有スペースであるおひさまランドを子ども達にどんな力をつけたのか、成長や発達を捉え話し合うことで、環境に変化を加えながら子ども達が自らのびのびと遊べる空間づくりが出来た。幼児組では、子どもの思いや考えに共感したり、寄り添ったりしながら保育の振り返りを通して環境を見直すことで、子どもが友達同士でアイデアを出し合ったり考えたりしてイメージが広がり、いきいきと遊ぶ姿がみられた。また職員間で話し合うことで、園庭の環境や使い方などクラスの枠を超えて考えることができた。

6. 今後の課題

- ・乳児の発達段階や個人差を踏まえての、遊びや環境について今後も保育者間の話し合いを深め、実践していく。
- ・「子どもの主体性の育ち」を見取り、教育保育の改善、充実を図っていく。
- ・身近な人や環境に自ら関わり、試行錯誤して遊びを継続したり夢中になって遊んだりする場や時間を確保していく。